

(3) ラーバーの浮遊層

ラーバーは水深5 mではあまり見られない。また水深40~50 mでも多くは見られず、ほぼ中層にあたる10~20 m前後に多く見られた。

2 付着稚貝調査

菅野 溥記・武田 雷介

序 言

近年アカガイの資源量減少により、アカガイ漁業そのものが不安定なものとなってきている。この対策として天然採苗による種苗確保に努めている。しかしながら、現在のところアカガイの場合には資源回復をまかなう程の稚貝確保にまで至っていない。

本年は、時期別に採苗器を投入した場合に、付着量にどのような影響を与えるかについての調査を行った。

方 法

(1) 採苗器の投入時期

採苗器への付着器の投入は次の4回にわたって行なった。付着器の種類は杉の葉と杉の葉を玉ネギ袋でおおったもの（以下杉の葉玉ネギ袋）の2種類である。

- 1回目・・・昭和43年8月12日
- 2回目・・・昭和43年8月19日
- 3回目・・・昭和43年8月22日
- 4回目・・・昭和43年8月28日

(2) 採苗器の設置場所とその構造

採苗器は第1図のように青森市奥内のアカガイ保護水面内に設置した。採苗器の構造は第2図のとおりであり、1連当りに10個の付着器を1 m間隔につけた。

(3) 付着量および稚貝の採取調査

稚貝の付着量および稚貝の成長状況をみるために、次の3回にわたって調査した。

- 1回目・・・昭和43年9月25日
- 2回目・・・昭和43年11月7日
- 3回目・・・昭和44年1月27日

稚貝の付着調査では各時期に上、中、下の付着器より30~100gの杉の葉を採取し、これを1

※武田 雷介：現在兵庫県水産業改良普及員 州本農林事務所駐在

kgりの付着量に換算した。稚貝の採取は昭和44年3月18日に行なった。

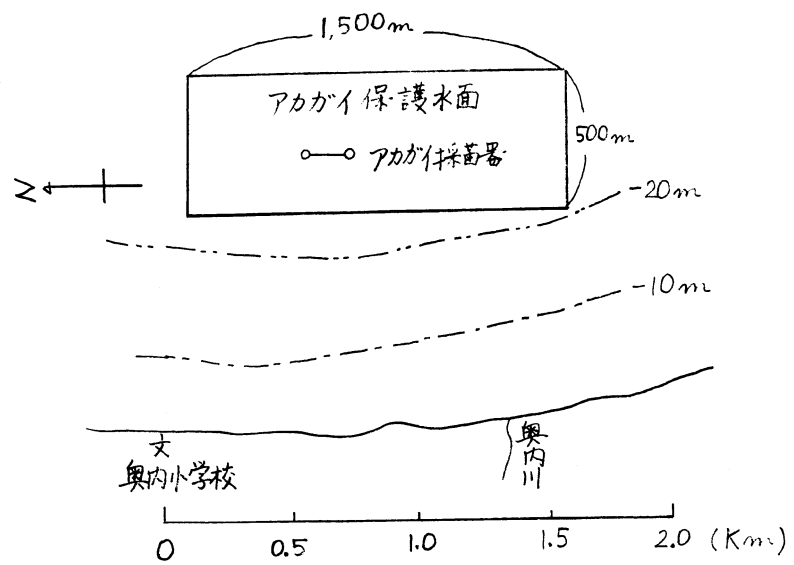
結果と考察

(1) 時期別投入による付着量

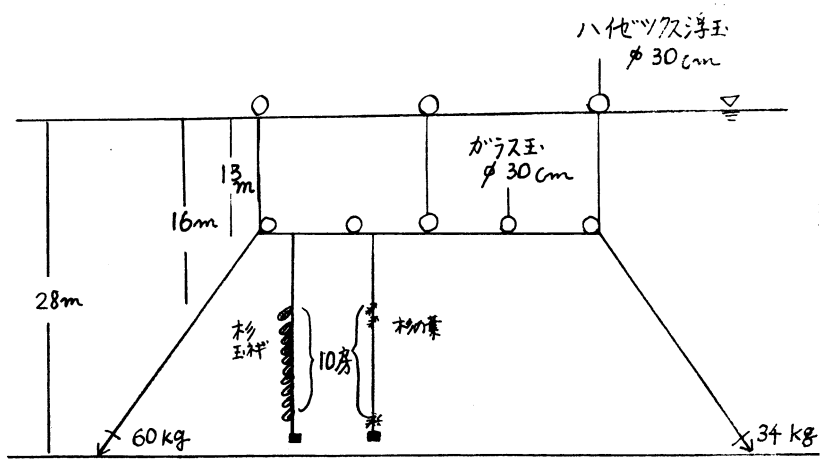
時期別に付着器を投入し、これに付着した稚貝の量は第1表のようになった。9月25日の調査では、8月19日から28日にかけて投入されたものへの付着量が、一連当り3,000~1,800個と多かった。この時の殻長組成が第3図であるが、殻長は0.2~2.6mmにわたり、8月12日投入のものでは1.0~1.2mmにモードがあり、その他は0.8~1.0mmにモードがあった。

これらのことからアカガイの付着時期にはかなりの幅があることがわかる。

1月27日の調査結果では、何れの時期のものも、杉の葉の付着が杉の葉玉ネギ袋を上廻っていた。



第1図 アカガイ採苗器設置位置



第2図 アカガイ採苗器の構造

(2) 殻長の変化

時期別、付着器種類別に投入されたものへの付着稚貝の殻長組成を示したのが第3.4.5.6図である。11月7日の調査では、遅れて投入されたものの殻長組成がやや小さな方に片寄っているが、杉の葉と杉の葉玉ネギ袋の間には大きな差がない。

しかし1月27日の第5.6図になると、杉の葉の成長が良いのに比べて杉の葉玉ネギ袋の成長が著

第1表 時期別投入による付着量と採取量 (1連当り = 10付着器)

調査年月日および採取年月日		昭和43年 9月25日	11月7日	昭和44年 1月27日	3月18日
投入年月日	種類				
昭和43年 8月12日	杉の葉	-	2,057	1,683	256
	杉の葉 (玉ネギ袋)	1,167	1,350	697	151
8月19日	杉の葉	-	1,640	723	294
	杉の葉 (玉ネギ袋)	3,000	1,797	350	129
8月22日	杉の葉	-	1,903	987	539
	杉の葉 (玉ネギ袋)	2,067	1,833	307	204
8月28日	杉の葉	-	1,523	1,680	909
	杉の葉 (玉ネギ袋)	1,800	2,243	1,023	116

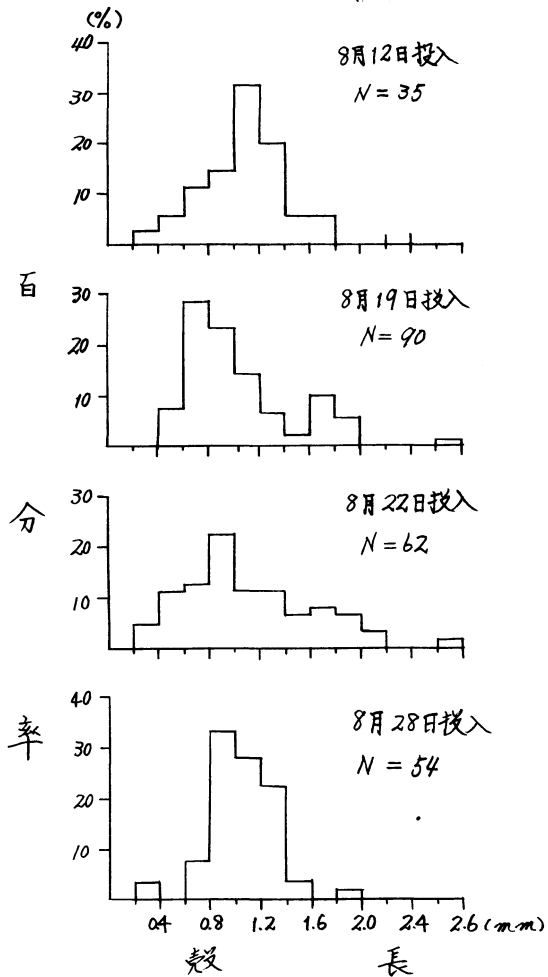
しく劣っていた。特に第6図の8月28日投入のものでは出現殻長範囲が1~7mmと非常に小さかった。

このことは、杉の葉玉ネギ袋では夏から秋にかけて各種貝類やヒドロゾア類、海藻類の付着が多く、特に付着器の外側をおおっている玉ネギ袋への付着が多い。このために玉ネギ袋の網目がつまり潮通しが悪くなったためこのような結果となったものと推察される。

なお11月7日の調査時点では、昭和42年の殻長組成とそう大きな差は見られなかった。

(3) 稚貝採取量

稚貝採取量は第1表のとおりであり、杉の葉が杉の葉玉ネギ袋を上廻った。前者は256~909個(1連当り)の採取であり、後者では116~204個であった。なお3月18日の稚貝採取では、付着器の杉の葉



第3図 時期別投入による殻長組成 (奥内9.25調査)

が腐れかかっており、ホタテガイで使用しているネットロンネットやサケ流し網等のように腐らない付着器材が望ましい。

杉の葉玉ネギ袋の稚貝採取量が少なかった原因の一つとして、既に述べたように成長が悪かったために採取のさいに見落としができたことも考えられる。

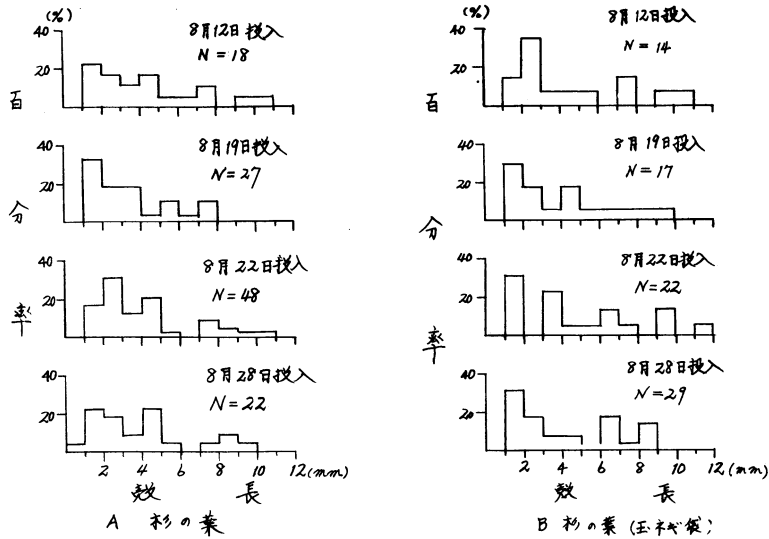
時期的に投入さ

れたものの採取量では、8月22～8月28日に投入された杉の葉の成績が良かった。このことは付着量の問題もあろうが付着器の腐れが後期のもの程少なかったことも起因していた。

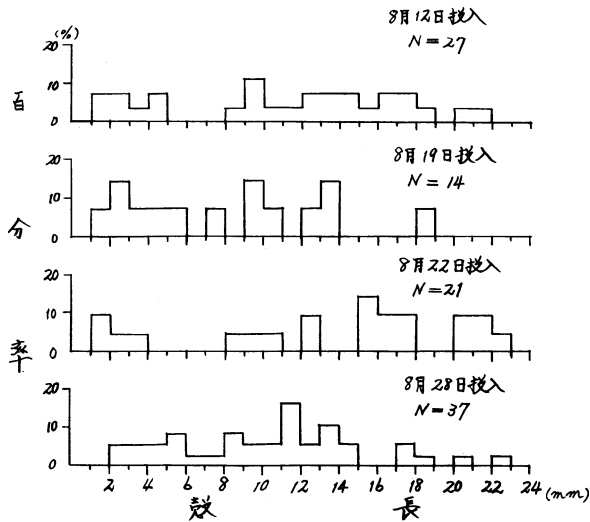
(4) 水深別の稚貝採取量

このことについては、第7.8図に示したとおりである。

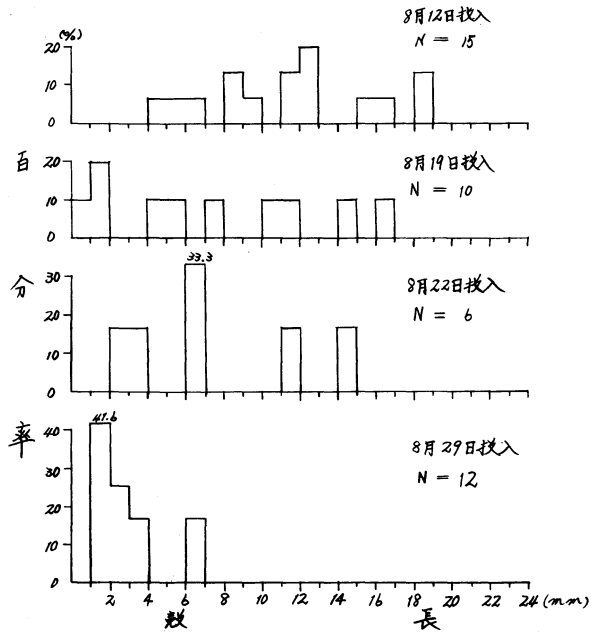
付着器は第2図のように水深1.6m(付着器垂下番号1)から2.5m(番号10)にかけて垂下されたが、一般的に上と下が悪く中間部の採取量が多かった。



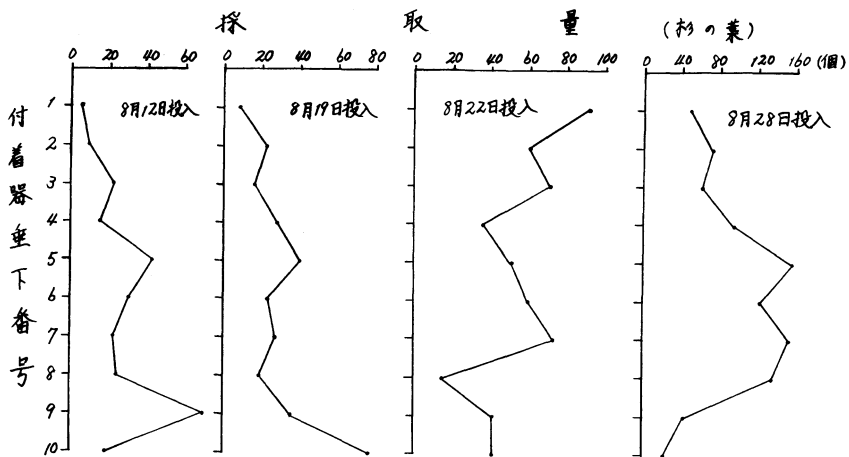
第4図 時期別投入による殻長組成 (1.1.7調査)



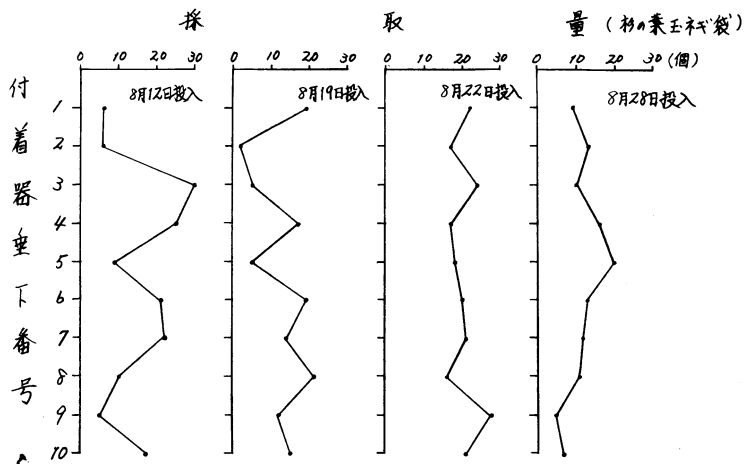
第5図 時期別投入による殻長組成 (奥内1.17調査 杉の葉)



第6図 時期別投入による穀長組成 (奥内1、27調査 杉の葉玉ネギ袋)



第7図 時期別投入による稚貝採取量



第8図 時期別投入による稚貝採取量

結 論

時期別投入による付着量は8月19日～28日の8月後半に投入された採苗器への付着量が多かった。稚貝の殻長組成は時期が進むにつれて杉の葉玉ネギ袋の成長が劣ったが、これは潮通しの悪さのためと推察した。

稚貝の採取量は、遅く入れられた採苗器で付着器が杉の葉の方がより多く採取できた。このことは付着量の差異はもちろんではあるが、付着器の腐れ具合も影響していた。

今後は腐らない付着器による採苗が必要であろう。